コリント人への手紙第一 7 章 25-40 節「ひたすら主に仕えるために」

小池 宏明 牧師

第一コリント 7 章の最後を取り上げる。ここでもパウロはコリント教会のメンバーから寄せられた質問に答える形で記している。

＊差し迫った危機のゆえに

未婚の人たちは「そのままの状態で留まっていた方が良い」とパウロは言う。それは、「差し迫っている危機」があるからだった。（25、26 節）危機が何なのか記されていないが、この時、食糧危機が迫っていたのではないかとも考えられている。当時は、農作物の収穫は天候に大きく左右されたため、ローマ世界ではたびたび飢饉が起きていた。豊かな大都会コリントであっても、大規模な飢饉が起これば、食糧の値段が上がって、やがては食糧が不足して、大きな苦難を経験することが目に見えていた。それで、若い夫婦が、あるいは生まれたばかりの赤ちゃんが、食べるにも苦労するような目に遭ってもらいたくない、とパウロは考えたのだろう。パウロとしては、教会を我が子のように愛して、常に祈り、親心をもって信徒たちを見ていたのであろう。

＊世の終わりに備えた生き方

また、同時に、パウロは、世の終わりが迫っていると判断していたようで、この世のさまざまなことに関わり過ぎて思い煩うことがないように勧めている。この世に関わり過ぎないということは、無関心で無気力で生きなさい、という意味ではない。天の御国に向かって歩む私たちは、地上のことに思い煩い過ぎる必要がないという「希望」である。この世の状態はやがてすべて過ぎ去ってしまうからだ。その時のために備えることが大切である。イエス・キリストこそ、この世のさまざまな苦難や危機、そして、この世の終わりにおいて、どうしても必要な救い主なのだ。35 節「**私がこう言うのは、あなたがた自身の益のためです。あなたがたを束縛しようとしているのではありません。むしろ、あなたがたが品位ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるようになるためです。**」この言葉には、パウロの一途な信仰がにじみ出ている。パウロはひたすら主イエス様にお仕えすることが生きる目的になるよう歩んでほしい、と願っている。

苦難や危機の中でも、主の教会を守り抜き、永遠の約束を信じ、地上の思い煩いから解放されて、ひたすら主に仕えて生きる、これが私たちの信仰生活である。